

弟子の諸条件

（ルカによる福音書14：25～35、イザヤ書50：4～9）

今朝は、ルカによる福音書14章25節から35節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「弟子の条件」と言う小見出しがついた個所と、これに続く、「塩気のなくなった塩」と言う小見出しがついた個所の、これら二つの箇所が説教のテキストになります。これら二つの箇所を一括して取り上げるのは、両者は内容的に密接に繋がっているからです。

さて、今日の箇所は、「大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた」と言う言葉をもって始まっています。この時主イエスは、ペトロ、ヤコブ、ヨハネと言った、12弟子たちと共に、エルサレムに向かって旅を続けておられたのです。単なる巡礼の旅ではありません。況してや、楽しみ満載の物見遊山ではないのです。エルサレムには、イエスを捕え、亡き者にしようと、手ぐすね引いて、待ち構えている者たちがいるのです。彼らによって、主イエスは、最後には十字架に磔にされて殺されるのですが、そんなこととは露知らず、無邪気に、飛んで火に入る夏の虫のように、エルサレムを目指しておられたのではないのです。すべてをお見通しの上で、それでも尚、否、それだからこそ、エルサレムを目指されたのです。なぜなら、「預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえない」（ルカ13：33）と、堅く信じ、御自身を、預言者たちの最後の者、即ち、彼ら預言者たちが預言したことの成就者、と、自覚しておられたからです。兎に角、この時、主イエスは、十字架を目指してエルサレムへの旅を続けておられたのです。そうとは知らない大勢の群衆は、或る者は好奇心から、或る者は一時の情熱に駆られて、また、或る者は自分が抱く夢の実現を願って、イエス一行につき従ったのです。そこで主イエスは、弟子となる覚悟のない者は、いずれ躓き、逃げ出すことを見越して、「あなたがたには、本当にその覚悟はあるのか」と、問われたのです。それが、今日の箇所の内容です。だから、ここには、彼らの気を引くような、表を砂糖でまぶした、甘い、誤魔化しの言葉は一切ありません。すべては本気の覚悟を促す厳しい言葉ばかりです。

26節で、主イエスは、こう言われます。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない」。改めて申しますが、主イエスは、この時、十字架を目指して歩んでおられたのです。それにしても、なぜ、主イエスは、十字架に架けられねばならなかったのか、と言うと、時の権力者たちがイエスを憎んだからです。では、なぜ、彼らがイエスを憎んだのかと言うと、彼らが、名誉であれ、血統であれ、財産であれ、この世のものを愛したからです。“憎む”と言う言葉は、大変インパクトが強過ぎて、主イエスに、「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない」などと言われますと、その途端に、私たちは落ち着きを失い、つい、ドギマギすると言うか、体のどこかに、強い抵抗感を感じます。主イエスと言うお方は、人間が生まれながらに持っている美しい自然の情まで否定されるのか、と、訝（いぶか）しくさえ思います。でも、“憎む”の反対は、“愛する”と言うことです。私たちが、イエス・キリストを主と仰ぎ、その弟子となる、と言うことは、取りも直さず、何ものにも勝って、イエス・キリストを第一に愛する、と言うことであって、それ以外のものを第一に愛すると言うことは、少なくとも弟子たるものに相応しくない、と言われても、

それは当然のことではないでしょうか。主イエス以外の、その他のものを憎む、とは、つい私たちは、その他のものを第一に愛するので、敢えて、主イエスは、強い言葉で、それらのものを“憎め”、と言われたのです。では、憎んだ後、どうなるのか、と言うと、一度、主イエス・キリストにお返しした、父も、母も、妻も、子供も、兄弟も、姉妹も、自分の命さえも、改めて、主イエス・キリストの手から、受取り直すのです。その時、それらのものは、私たちの当然の関係、或いは、当然の所有物ではなくなり、恵みとして与えられたものとなるのです。確かに、表面的には、以前と何も変わりません。でも、内的には、それらとの関わりは、全く違ったものになるのです。当然であったものが、恵み、賜物に変わるからです。こうして、家族も所有物も、今や、恵み、賜物となったのですから、忝（かたじけな）いと言う思いから、感謝して受け、以前よりももっとも大切にし、時には、喜んで手放すことさえできるようになるのです。尊さが増す一方で、よい意味で、拘りや、執着がなくなるのです。つまり、内的自由を得るのです。ルカによる福音書9章24節に、「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである」と言う、主イエスのお言葉が出て来ましたが、それは外でもない、この関係を指して言ったことだったのです。

「わたしの弟子ではありえない」と言う言葉は、27節でも繰り返されます。ここでは「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」と言われます。主イエスは十字架を目指しておられるのです。それに着き従う弟子が、それとは全く別の道を歩むと言うことは、理屈から言っても、あり得ないことです。主イエス同様、当然十字架を背負うことになるのですが、しかし、それは自分の十字架であって、他人の十字架まで背負う必要はないのです。それは、キリストに従う以上、避けて通れないことなのです。そのことによってこそ、キリストとの一体化は、起こるからです。パウロが、フィリピの信徒への手紙1章29節で述べているように、「(私たちは)キリストを信じることでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです」。ここで私たちが見落としてならないのは、「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ」と言われる際の、“ついて来る”と言う言葉です。誰の後に着いて行くのか、と言うと、言うまでもないことですが、主イエス・キリストの後について行くのです。先頭には主イエス・キリストが先立っていてくださるのです。しかも、誰よりも大きな十字架を背負って、先を歩まれるのです。私たちは、その後を、それとは比べ物にならない程の小さな、小さな十字架を背負って、ついて行くのです。高く積もった雪の中を、ラッセル車が除雪した後を、楽々と普通の汽車が走るようなものです。だから、十字架を背負って、と言っても、気後れしたり、気落ちしたりする必要はないのです。常に、主イエス・キリストが先頭に立ち、励ましてくださり、走り易いように、心を砕いてくださるからです。

ここで主イエスは、二つの譬え話を語られます。一つは、搭を建てようとする者は、先ず建てるに先立って、腰を据え、一体費用はどれほどかかるか、計算しないだろうか、と問い、それをやらないで、搭の建造に着手するとすれば、土台はできても、それ以上は工事を進めることができず、と言うことにもなり、そうなれば、「あの人は建て始めたが、完成することはできなかった」と、皆の笑いものになるだろう、と言う話です。気ばかり多くて、堅実性、着実性に欠ける、と言うことは、決して珍しいことではありません。弟子となる道も、よく考えもせず、猪突猛進、騎虎の勢いで、最初、突っ走ったものの、息切れがしたり、情熱が冷めたり、と言うことは、往々にして起こることです。そうなれば、本人にとって不幸なばかりか、捲き添いを食った人々をも不幸にさせてしまいます。否、そ

れ以上に、一番宜しくないのは、神の栄光を甚だしく傷つけることになることです。

次の話は、戦争の話です。戦争は、王か独裁者の専売特許です。普通の人間に戦争などできません。だから、ここにも王が登場します。或る王が、戦争をしようと思かけるのですが、こちら側には一万の兵しかなく、相手側には、その倍の二万の兵がいる場合、負けるのは、戦う前から分かっています。それでも尚、戦おうとするとすれば、余程の愚か者と言うことになります。だから、逸早く、使者を送り、和を乞え、と言うのですが、この場合一番問題になるのが、沽券であり、面子です。そんな格好の悪いことができるか、と、詰まらぬ沽券や面子に拘るとしたら、取り返しのつかない悲惨な結果を招くことになってしまいます。一切の拘りを捨てよ。「身を捨ててこそ、浮かぶ瀬もあれ」と言うのではないか、と、言う訳なのです。この譬えでは、積極的に和を講ずることを勧めているように思われます。そうとしか理解できないのは、33節に、「だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない」と、そう述べられているからです。この譬えに出て来る相手の王とは、神、或いは、キリストを暗示しているのです。このお方とは、一刻も早く和解して、己を明け渡し、王としてお迎えしなさい。それこそが本当の救い、また、そうなるこそ、あなたがたは私の真の弟子となるのではないかと、主イエスは、そう仰るのです。宗教改革者のジャン・カルヴァンが、信仰を定義して、「信仰とは、神に座を明け渡すことだ」と、言いました。神の前に無条件降伏をして、完全にその支配下に入るのです。それで、悲惨になるかと思いきや、現実には、その反対で、自分からも、この世からも、詰まらぬ名誉心からも、解放されて、真に、自由の身となるのです。そうなるこそ、キリストの弟子として相応しく、地の塩たるの役割を果たすことができるのではないかと、言う訳で、必然的に、次の箇所「塩気をなくした塩」と繋がることになるのです。だから、或る聖書では、33節以前の箇所と、34節以後の箇所を切り離さずに、これらを一つの纏まりとして扱っているのですが、こちらの方が自然である、と言ってよいのではないのでしょうか。

ここでは、こう言われます。「確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだ」。人間にとって、塩は大切なものです。塩がなければ、生命を維持することもできません。塩は腐敗を防止し、料理には欠かせません。その働きは、表立っては見えにくいので、注目度は低いのですが、常に、隠れた立役者的な働きをします。でも、もし、見た目、本物の塩に見えながら、実際には、塩気を失っていて、本来の塩の働きをしないとすれば、どうなるか。最早、土にも肥料にもならず、捨てられる外はない、ということになるのではないかと、主イエスは言われるのです。しかし、それにしても、一体全体、塩が塩気を失う、と言うようなことが、実際に起こり得るのか、私たちには不思議に感じられます。でも、古代パレスチナでは、そうしたことは、決して珍しくはなかったようです。当時の塩は、主に岩塩ですが、岩塩には、塩ばかりではなく、他の化学物質も含まれていて、精製技術がまだ未熟だったその時代、塩と言っても、他の化学物質も多量に含まれていて、暫く、時間が経つ内に、塩は溶け去り、他の化学物質だけが後に残り、塩気のないそれ以外の化学物質の塊になってしまう、ということが起こったようです。また、塩は当時大変高価であったため、商人は、市場で塩を売る場合、純粋な塩ではなく、塩に混ぜ物をして、嵩（かさ）を増やし、客の目を誤魔化して、塩を売ったようです。だから、塩の生産地から直接に買った塩ならばいざ知らず、市場で買った塩には、紛い物が多く、家の誰かが、塩を市場で買った、と言え、主婦ならば、多少は誤魔化しがあることを覚悟したようです。と言うような訳で、塩気のない塩、と言うのは、決して荒唐無稽の作り

話ではなく、極めてリアリティーのある話なのです。それと同様に、塩気を失ったキリストの弟子、と言うものにも、大いにリアリティーがあるのです。キリストの弟子の場合、塩気が抜けるとは、つまり、未だ完全には、神に、或いは、キリストに座を明け渡していない、と言う状態を指すことは、わざわざ言うまでもありません。

以上見て来たように、ここまで、随分厳しい言葉が続きました。が、しかし、主イエスは、最後に、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言う言葉をもって、この個所を締め括られるのです。専制君主のように、有無を言わず、何が何でも従え、とは言われたいのです。況（ま）してや、力づくで、などと言うようなことは、決してなさらないのです。最後は、あなたが判断しなさい。あなたが良し、と思えば受け入れなさい。そう思わないのなら、それも、また、致し方のないことで、結構、と。勿論、自分の決断には、一切自分が責任を負わねばならないのは、言うまでもないことです。最早、誰かの所為（せい）にすることはできないのです。それは覚悟の上で、あなたの人生なのだから、自分が納得できるまで十分に考えて、人に言われてではなく、自分で納得して、自分で決断しなさい、と、そう言われるのです。嘘があってはいけないのです。信仰にとって何より大切なのは、真（まこと）なのです。何故なら、信仰とは、真実の言い換えだからです。信仰を意味するヘブル語のエムナーも、ギリシャ語のピステイスも、いずれも、それは、“真実”、“真”を意味するのです。

しかし、主イエス・キリストは、そうは言われつつも、その心底は、何時か、誰もが、固き心を砕かれて、喜んで、主イエス・キリストを受け入れることを、忍耐強く、待っておられるのです。讃美歌 517 番の 1 節では、こう歌われます。「『われに来よ』と主は今、やさしく呼びたもう。などて愛のひかりを/避けてさまよう。『かえれや、わが家に/帰れや』と主は今呼びたもう」と。これこそは主イエス・キリストの真実の思いなのです。それは、強制ではなく、愛の呼び掛けなのです。

私たち、常に、これに応える者でありたく思います。

(三輪恭嗣)